

厚生労働行政推進調査事業費補助金  
障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）

総合研究報告書

研究課題名：医療的管理下における介護及び日常的な世話が必要な行動障害を有する者の  
実態に関する研究（課題番号：H27-身体・知的-指定-001）

研究代表者 市川 宏伸：日本発達障害ネットワーク 理事長

研究分担者

内山 登紀夫：大正大学心理社会学部 教授

井上 雅彦：鳥取大学医学系研究科 教授

志賀 利一：国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 事業企画局研究部長

高橋 和俊：社会福祉法人侑愛会・おしま地域療育センター 所長

田中 恭子：熊本大学医学部 特任助教

堀江 まゆみ：白梅学園大学こども学部 教授

會田 千重：国立病院機構肥前精神医療センター 精神科医師

小倉 加恵子：森之宮病院神経リハビリテーション研究部 研究員

小野 和哉：聖マリアンナ医科大学 精神医学教室特任教授

田淵 賀裕：関東医療少年院 法務技官

研究要旨：知的・発達障害福祉支援施設の現場では、医療・福祉職員の不足、医療と福祉の連携不足、が指摘されている。一方で連携の重要性は福祉・医療とも認めているが、現状では不十分であることを報告してきた。この3年間で、福祉における医療スタッフ（医師、看護師、コメディカル）の現状を東京都社会福祉協議会、手をつなぐ育成会を通じて調査した。医療利用におけるいくつかの課題についても検討対象とした。福祉施設利用の知的・発達障害者への健康状態診断の現状、“知的障害・発達障害の人間ドック”についても現状、これからの試みを調べた。国内にある先進的事例が少ないと考え、英国（27年度）、デンマーク（29年度）の福祉現場の見学を行い、国内の状況と比較を目指した。研究参加者全員で、今後の方向性を話し合い、現状分析と今後の提言を検討することとした。福祉と医療の連携を密にするための具体的手がかりとなることを念頭に、この研究が役立つことを願っていききたい。

## A．研究目的

知的障害・発達障害児者における医療は量的にも質的にも十分ではない。現状として、福祉施設における医師、看護師の量・質について、東京都社会福祉協議会加盟施設、手をつなぐ育成会加盟施設を対象に行った。医療施設における、知的障害・発達障害児者の入院状況について、全国児童青年施設協議会、国立病院機構、日本精神神経科病院協議会加盟病院を対象に調べた。知的障害・発達障害児者への加療経験について日本児童青年精神医学会、日本小児神経学会の会員を対象に調査した。福祉施設利用者の健康状態の把握、地域における健診状況についても調査をした。知的障害・発達障害者への“人間ドック”の現状、今後の実施の方向性について調べた。国内における先進的試みが少ないと考え、英国、デンマークの現状調査を行った。

これらの調査の結果を前提に、今後の方向性について検討を行うこととした。

## B．研究方法

4つの視点から現状調査と方向性の検討を行った。福祉施設における、福祉スタッフと医療スタッフの連携の現状を調査し、課題と対応について調査研究した[東京都社会福祉協議会加盟施設、手をつなぐ育成会加盟施設、のぞみの園(群馬)、渡島コロニー(北海道)など]。成人知的障害・障害者医療の中心を担う、精神科医に対する保護者の意識も調査した。また知的障害・発達障害児者を念頭に置いた医療への受忍性を高めるためのプレパレーションについて検討した。行動障害の入院を中心に、医療機関における知的障害・発達障害児者の

入院実態について調査した[全国児童青年精神医療施設(全児協群)、国立病院機構(国立機構群)、日本精神科病院協会(日精協群)など]。知的障害・発達障害に関わる医師の意識を中心に、児童青年精神科医、小児神経科医についてアンケート調査を行った。この調査は10年ほど前に同様の調査を行っており、その結果と比較した。精神科病院に長期に入院していた行動障害者の社会復帰の一環として福祉施設における受け入れを調査した[のぞみの園(群馬)]。福祉施設入所者の医療的ケアの必要性、医療内容の種類について調査した[渡島コロニー(北海道)、のぞみの園(群馬)、三気の里(熊本)など]。知的障害・発達障害者を対象とした“障害者人間ドック”については、実施されている杉並区の状況と、これから企画している大牟田市の試みについて調査した。先進国の例として、英国とデンマーク2か国の福祉と医療の連携について見学を行った。

## C．研究結果

については、医師、看護師ともに定数を充足していない例もあり、勤務形態も不安定であった。児童精神科医、小児神経科医を対象とした調査からは、80~90%の医師が福祉における医療の重要性に気づきながら、実際に福祉医療へ関わった医師は少なく、福祉現場における医療の難しさを反映していた。このことは、養成過程における講義・実習の乏しさと関連しているように思われた。知的障害・発達障害を対象とする精神科医に対する保護者の意識調査では、「成人を対象にした精神科医の質的な差が大きいこと」、「児童期の医師から成人

期医師への引継ぎに課題があること」、「精神科医師の役割に対する親の期待と医師自身の意識にはズレがあること」などが指摘された。また、看護教育の教科書における福祉の記述はほんのわずかであった。知的障害・発達障害児の診察、処置においては、従来の小児科での定型発達児への対応とは異なった対応が必要であり、病院スタッフを対象としたプレパレーション研修プログラムの開発などが必要であると考えられた。高齢化及び医療の高度化に伴って医療的ニーズが今後さらに高まっていくことが予想され、新たな体制整備について検討していく必要があると考えられた。については、全児協群、国立機構群および日精協群の3群の比較を行い、診断ツールや、薬物療法、カウンセリングに著しい差は認めなかったが、TEACCHやABAなど発達障害に対する専門療育の割合が、国立機構群が多かった。3群の共通事項として、知的・発達障害患者のニーズは高いが受け皿がないというのが現実であった。約10年前の調査との比較では、大きな変化は見られなかった。行動障害が顕著で、家庭生活が困難な知的障害・発達障害のある精神科病院入院者の地域移行の一環として、福祉施設での入所生活の試みが行われた。については、福祉施設における知的障害・発達障害者は、年齢が高いほど、ADLが低いほど、医療的ケアが必要であった。1年間に医療機関を利用した者はほぼ100%であった。強度の行動障害を示す者は、医療的ケアのニーズは高いが、障害が重いほど、入院になりにくい傾向がみられた。それは健康であることを意味するものではなく、身体症状の気付かれにくさや、入院治療を行う困難さを

示していると考えられた。高齢期に達した知的障害者は生活習慣病のリスクが高まる一方で、認知機能の衰えが一般高齢者より早く、自ら訴えることが少ないため、より一層の健康診断が必要と判断された。知的障害・発達障害の健診を先進的に行っている杉並区の病院では、病院全体のコスト削減の方針により、“障害者人間ドック”の実施が危ぶまれる状況にあり、何らかの経済的支援を考える必要があると判断された。実現が待たれている大牟田市の健康診断計画も、当事者と医師会の意識の違いがあり、思ったほどに進んでいない。の先進国見学では、イギリス調査においては、主に知的障害のある人への医療受診支援を中心にシステムおよび実態を検討した。知的障害のある人の健康維持や医療サービスの提供、医療受診支援に関しては、〔第一機能〕知的障害等のある人の「通常の医療提供」および「特別な配慮の医療受診支援」を実施していた医療機関、〔第二機能〕「地域サービス」「生活施設」「教育」における知的障害等のある人に対する医療受診支援、〔第三機能〕「権利擁護」支援として医療受診支援に関与する機関、が相互連携しながら機能していたことが明らかであった。デンマーク調査においては、知的障害および自閉症スペクトラム障害があり行動障害を有する人の支援としては、ICF（国際生活機能分類）における「健康」状態の達成が共通の目標となっていることが明らかであった。医療サービスの提供については、一般市民が利用する医療システムを円滑に活用することで、健康の維持が進められてた。特に、暮らしの中の「健康」状態を作り出すために、〔福祉における居住支援・日中支援〕

および〔教育実践〕において、環境調整や合理的配慮のもとに徹底した個別支援が実施されていた。

#### D．考察

知的障害・発達障害の医療について、量・質ともに劣っていることが推測された。今回の研究からは、専門研修の拡充：医師・看護師とともにその養成過程において、福祉の中の医療という概念は乏しく、多くの従事スタッフも、自分の経験をもとに手探りで行っていた。医師・看護師の養成過程に、選択科目でもよいので、福祉実習を入れるべきである。職員教育の必要性：例えば、福祉施設職員の養成過程において、医療関係の講義を一定の数取り入れるべきである。現場職員である保育士は国家資格であり、授業の担保が可能であるが、指導員はそうではなく、質の担保が難しい点を考慮すべきである。施設設備の充実：補助金による経営が中心の福祉施設ではあるが、医務科等を充実させることが利用者にとって重要である。医療連携体制の確保：医療スタッフの多くも福祉の現状を理解しておらず、福祉スタッフも医療の現状を理解していない中で互いに相手を理解する必要がある。医療の関与を促進する施策の促進：知的障害・発達障害があっても、ない場合と同等の医療を受けることが出来て初めてノーマリゼーションとは言えるであろう。

福祉施設での医行為の範囲の明確化：福祉施設の中では、医療スタッフは少数派であり、そのスタッフが力を発揮する環境を整備することで、利用者の「医療を受ける権利」を満たすべきである。知的障害・発達障害の当事者・保護者も健常者と同等

の医療を受ける権利を主張する必要があると思われる。知的障害・発達障害者への“人間ドック”などについても、何らかの資金的補てんを考えるべきである。

#### E．結論

ノーマリゼーションという言葉が知られるようになって久しいが、知的障害・発達障害があっても、同等の医療が受けられているだろうか？時間が必要だとは思いますが、「障害があるからこの程度で十分だろう」という発想がどこかにないだろうか？障害があるか否かは紙一重であり、障害者が社会に適応するのではなく、社会全体が知的障害・発達障害を受け入れるようになることが最善であろう。

#### F．健康危険情報

特になし

#### G．研究発表

(別紙)

##### 1 論文発表

市川宏伸 発達障害とは p8-19 「はたらく」を支える 職場×発達障害(五十嵐良雄編)南山堂(東京)H.29.6.(2017)

市川宏伸 学術研究の期待 日本発達障害ネットワークから p267 特別支援教育の到達点と可能性(柘植雅義&「インクルーシブ教育の未来研究会」編)金剛出版(東京)H.29.9.(2017)

遠藤季哉、永吉 亮、市川宏伸 児童医療機関 発達障害支援の実際 p19-23 支援

- の基本から多様な困難事例への対応まで  
(内山登紀夫編) H. 29.11.(2017)
- 市川宏伸 成人の発達障害 - 小児期に出来ること - 東京都小児科医会報 別冊 36  
57-60 H.29.11.(2017)
- 市川宏伸、小倉加恵子. なぜメンタルヘルスなのか. 子どもと家族のメンタルヘルス.  
小児内科. 49 : 639-644 H.29.5.  
(2017)
- Ichikawa, H., Mikami, K., Okada, T., Yamashita, Y., Ishizaki, Y., Tomoda, A., Ono, H., Usuki, C. and Tadori, Y. Aripiprazole in the Treatment of Irritability in Children and Adolescents with Autism Spectrum Disorder in Japan: A Randomized, Double-blind, Placebo-controlled Study  
Child Psychiatry Hum Dev 48 796-806  
(2017)
- 海老島 健、市川宏伸 子供のうつ病に対する抗うつ薬の使用 臨床精神薬理 21  
107-110 H.30.1.(2018)
- Ichikawa, H., Hiratani, M., Yasuhara, A., Tsujii, N., Oshimo, T., Ono, H. and Tadori, Y. An open-label extension long-term study of the safety and efficacy of aripiprazole for irritability in children and adolescents with autistic disorder in Japan. Psychiatry and Clinical Neuroscience 72 84-94(2018)
- 市川宏伸 自閉症の支援と医療 S S K P  
みち 92 6-11 H.30.2.(2018)
- 市川宏伸 発達障害の理解と治療 - 臨床で出会う発達障害とその対応 東京精神科病院協会誌 別冊 第31回東精協学会特集 31号 18-21 H.30.2(2018)
- 樋口輝彦、斎藤万比古、市川宏伸、石崎優子、大谷哲也、小野沢 要 Fluvoxamine maleate (SME3110) の小児強迫性障害患者を対象としたプラセボ対照無作為化二重盲検比較試験及び非盲検長期投与試験(第相臨床試験)臨床精神薬理 21 371-385  
H.30.3.(2018)
- 2 学会発表等
- 市川宏伸 発達障害と医療 墨田区医師会学術講演会 墨田区医師会(東京)2017.4.20
- 市川宏伸 発達障害の見分け方と対応 第26回地域精神保健講座 クボタ心理福祉研究所(東京)2017.5.12
- 市川宏伸 発達障害支援法と行政の役割 山梨県立こころの発達総合支援センター研修(山梨)2017.6.14
- 市川宏伸 精神科医にとっての生涯教育: ベテラン期 - 生涯教育委員会シンポジウム - 第113回精神神経学会(名古屋)2017.6.22
- 市川宏伸 発達障害のある子ども-気づきとその対応- 平成29年度 精神保健福祉研修(前期) 東京都社会福祉保健医療研修センター(東京)2017.6.26
- 市川宏伸 成人の発達障害-小児期に出来ること 第105回東京小児科医会学術講演会 第105回東京小児科医会学術講演会(東京)2017.6.18
- 市川宏伸 深めよう! 発達障害に対する理解と歯科場面における合理的配慮 歯科衛生士研修会 東京都立心身障害者口腔保健センター(東京)2017.7.2.
- 市川宏伸 発達障害の特性理解 発達障害支援スーパーバイザー養成研修(東京)2017.7.25

- 市川宏伸 診断と医療的支援の取り組み方と留意点 自閉症スペクトラム支援の実践知をつなぐ 明治安田こころの健康財団(東京) 2017.7.29
- 市川宏伸 ASD等を巡る最近の臨床的話題 釧路市小児科診療連携フォーラム(北海道) 2017.7.24
- 市川宏伸 発達障害への配慮について考える 裁判所職員総合研修所 教官研修(埼玉) 2017.7.26
- 市川宏伸 最新医療から見る障害特性 医療と心理 - 発達障害を中心に - 江戸川区立学校特別支援学級担当教諭専門研修(東京) 2017.7.31.
- 市川宏伸 発達障害について 日本カトリック幼児教育連盟 第60回教職員研修大会(東京) 2017.8.4.
- 市川宏伸 発達障害の理解と支援 平成29年度管理職のための特別支援教育リーダーセミナー(愛媛) 2017.8.24
- 市川宏伸 「親として支援者として、発達障害の育ちを支えること」 2017 JDDnet セミナー in ながの(長野) 2017.9.23
- 市川宏伸 発達障害への医学的対応 発達障害・情緒障害教育専修プログラム講義(神奈川) 2017.10.10
- 市川宏伸 自閉症スペクトラム障害との関わり - 親として、医者として - 宮城県自閉症協会 設立50周年記念講演会(宮城) 2017.10.29
- 市川宏伸 発達障害への理解を深めるために 埼玉県警察研修(埼玉) 2017.10.17
- 市川宏伸 発達障害と社会的課題 南児相勉強会(埼玉) 2017.11.7
- 市川宏伸 福祉と医療 日本自閉症協会 地域サポート事業 in 岐阜 2017.11.11
- 市川宏伸 発達障害への理解と現状について 精神科医・小児科医を対象とした発達障害児・者研修 2017.11.19
- 市川宏伸 これからの自閉症支援 - ライフステージを通して考える - 自閉症スペクトラム講演会(山口) 2017.11.25
- 市川宏伸 施設における強度行動障害支援の実際 - いくつかの実践を通して - ネットワーキングフォーラム(青森) 2017.11.30
- 市川宏伸 ASDの状態像について - 臨床をされていて感ずること - 東京都自閉症協会50周年シンポジウム第2部 2017.11.26
- 市川宏伸 高等学校における困難を抱えた生徒への組織的対応について ~ 発達障害医学の立場から ~ 平成29年度石川県高等学校生と指導連絡協議会 2017.12.4.
- 市川宏伸 大人の発達障害 事例から学ぶ職場のメンタルセミナー 大阪中災防 2017.12.6
- 市川宏伸 発達障害の子どもや人々を支援する NPO法人 ファミリーコンサルティング協会 2017.12.9.
- 市川宏伸 発達障害がわかると進むこころのバリアフリー 心のバリアフリーシンポジウム(川崎) 2017.12.12
- 市川宏伸 発達障がいの理解と対応 - 求められる支援 - 平成29年度大田区「発達障害シンポジウム」 2018.1.21
- 市川宏伸 子どもの発達障害と医療 第334回 岐阜県障害幼児研究会 2018.1.29.
- 市川宏伸 大人の発達障害 事例から学ぶ職場のメンタルセミナー 中部中災防 2018.2.5
- 市川宏伸 発達障害の特性とライフステー

ジ 平成 29 年度 東京都発達障害者支援  
体制整備推進事業 2018 . 2.25

市川宏伸 発達障害の正しい理解とライフ  
ステージを通じた支援ー医師、支援者、父  
親として、大切にしてきたことー 相模原  
市発達障害啓発講演会( 神奈川 )2018 .3.5 .

市川宏伸 大人の発達障害 事例から学ぶ  
職場のメンタルセミナー 東京中災防  
2018.3 . 19

#### H . 知的財産権の出願・登録状況

##### 1 . 特許取得

なし

##### 2 . 実用新案登録

なし

##### 3 . その他

なし